

平成 30 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： 認知症対応型共同生活介護施設 グループホームぬくもり(うめユニット)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393100128		
法人名	社会福祉法人 健慈会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護施設 グループホームぬくもり(うめユニット)		
所在地	岩手県九戸郡野田村大字玉川第5地割45-22		
自己評価作成日	平成30年9月11日	評価結果市町村受理日	平成30年11月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.mhl.w.go.jp/03/1/index.php?act=on_kouhyou_detail_2017_022_kani=true&ji_gyosyoCd=0393100128-00&PrEfCd=03&VerSj=onCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成30年10月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人ひとりが、その人らしい生活スタイルを保持し毎日を安らぎがあり安全に過ごせるように支援し、職員と利用者が助け合いながら日々を過ごしている仲の良いユニットです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

三陸鉄道野田玉川駅の正面に位地し、隣接して村の農村公園のある静かな環境に囲まれている。全体を統括する施設長の下で、地域密着型特養(結の里)と二つのユニットのグループホームが一体的に運営される。利用者はユニットの区分を超えて自由に行き来し、朝食後は最高齢の利用者を交えてトランプに興じるなど、笑い声と冗談が絶えない明るく元気な事業所である。東日本大震災後の開設とまだ日も浅く、地域との繋がりが次の課題と、発災時の避難所の指定を受け住民の安心安全に寄与しながら、小学校に通う子供たちの夏休み期間中の居場所として、施設を地域に開放する取り組みを模索している。これは、職員が働きやすいよう、子どもを連れた出勤を可能としていることが基礎になっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

平成 30 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名： 認知症対応型共同生活介護施設 グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	2月毎の定例ユニット会議で企業理念を確認し利用者の支援に心掛けるように努めている。	法人の施設基本理念を基礎にしながら、ユニット毎に2月に1度全員が集まる会議で、「感染症予防のための水分補給」「積極的な屋外活動」など、季節等に応じ、支援に当たり全員が常に頭くべき課題を目標としてを定め、実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	保育所・学校行事見学や施設行事の余興等を通じ交流を図ることが出来ている。村内行事・祭りも楽しみにしている。	村の要請に応え、縁の希薄な旧玉川鉾山運動場跡の村有地に施設を設けたこともあり、地域との交流の活発化はこれからの課題である。そのため、施設の行事にとどまらず、夏休み期間等の子供たちの居場所として、施設の一部を開放することを地域に提案している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度も畑をお借りし、作業を通じて地域の方とのコミュニケーションをしている。またボランティアの方の受け入れをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員の方々より、施設で地域に出来る事や必要とされる事を会議の度に話し合い、今年度は地域の方に慰問へお誘いし施設を身近な所として頂けるように働きかけた。	結の里(地域密着型特養)と合同で開催し、年間事業計画、活動報告、利用者の様子などが話し合わせ、併せて地域の方々の来訪を働きかけている。今後、ヒヤリハットの事例報告やその改善状況についても報告し、意見を頂きたいとしている。	運営推進会議を通じた地域との交流を効果的に働き掛けるためにも、地域の警察、消防の関係者、保育園、小中学校の中心的立場の方の委員就任の検討が望まれます。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月の地域ケア会議でサービスが必要な方の情報を聞いたり、施設で協力できることを積極的に伝え、各関係機関の方との協力関係作りに努めている。	役場とは密に連絡を取りあい、親身に相談に乗ってもらい、また、村社協主催で毎月開催される地域ケア会議は、地域のお年寄りの状況等、情報交換や相談の場でもある。村から福祉避難所に指定され、一定数の緊急用ベッド等を用意している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人での身体拘束廃止委員会を基に安全対策委員会と並行し利用者の安全を考えながら身体拘束禁止を念頭に支援している。	地域密着型特養との併設でもあり、以前から身体拘束廃止委員会が機能し各種研修にも職員を派遣している。施設が広いため、保護者の同意を得て特養等への出入り口に施錠しているが、利用者が開扉しようとするれば鈴で知らせ、職員が解錠している。	

[評価機関： 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人で外部研修に毎年参加し施設内研修を行っている。職員間でも互いに気を付け利用者の身体の傷や不穏症状等も注意して観察している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎年、施設長・相談員・管理者は外部の研修に参加し学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所時は契約書・重要事項説明書を丁寧に説明している。今年度は改めてADL低下の家族にはリスク説明を行って支援方法の理解と協力をお願いする。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者と家族からの意見や意向を常に聞くように努めている。また傾聴できる雰囲気作りや関係性作りにも努めている。	利用者の転倒に関連し、重要事項説明書記載の「賠償すべき事故」について家族から疑義が寄せられたため、改めて利用者一人一人の家族に面談のうえ「リスク説明」を文書を添えて行い、了解を得ている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議で積極的な意見を出し合い、入所者・デイ利用者の現状を把握し職員と話し合い意見を反映させている。	全員参加で2カ月毎に開催されるユニット会議で職員の改善提案を話し合っている。小さな改善でもまず実行を基本とし、最近では、利用者のミスを防ぐため便座の蓋を取り外し、職員の清掃業務の効率化にも結び付けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の就労条件を考慮した勤務時間に行っている。お互いが助け合い働きやすい環境作りが出来ている。給与は経験・資格を考慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得の為の研修や勤務年数や経験に沿った外部研修をすすめ受講している。また同じ系列の施設と合同で研修を行い研修の機会確保している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部の研修会、GH協会講習会・交換研修会、北三陸塾での講演等に積極的な参加に努め交流の機会とサービス向上に繋げている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前・入所後共に本人と家族に丁寧に意向や情報を伺い、早く入所生活に慣れ穏やかな生活を過ごして頂けるように傾聴・関係作り、情報の共有を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用者の様子や入所し思いの食い違い等がどうしてもあるため、入所後は本人・家族とも関係作りのため傾聴の機会に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約時に家族には「どんな些細な事でも気になった事は職員に教えて下さい。家族にしか言えない愚痴もあり話されますので」とお願いし、また面会の際は家族の傾聴し『その時』必要なサービスを支援出来るように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の残存機能を活かし、出来る限りこれまでに近い生活を送ってもらえる様、介助が必要か否かを見極め、家事を手伝ってもらい共同生活をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の面会時には日頃の様子を伝えている。入所時・長期入所の方も常に新しい情報が聞けるように家族と一緒に支援しているように心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会の方々には、ゆっくり過ごしてもらえる様に、居室でお茶を提供し職員も様子を伝えながら関係作りに努め次の面会へ繋がる様に努めている。	かつて教壇に立った最高齢者には、今でも年に何回と教え子が訪れ、ホームで用意したお茶を飲みながら友人のように楽しそうに話している。「家族に一番期待している」利用者本人の思いを伝えたい、家族との距離を縮めたいと、通院は家族対応としている。遠方の家族は、普段面会できない分、盆や正月の帰省時には外泊を勧めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	行事・レクリエーションで関係性を築ける様に、職員が利用者の橋渡しをし円滑な関係作りに努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他法人特養施設に移られた方の施設から情報の問い合わせや家族からの相談が有り、対応している。同法人内で移られた方とは利用者が行き来して交流が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話・行動等から利用者の意向をくみ取る様に努めている。サービス計画書にも取り入れ、必要時は家族の協力もお願いしている。	これまでの生活スタイルを崩すことなく、やりたいこと、出来ること、得意なことは年齢を重ねてもやっていただきたいと、利用者の性格も考慮しながら、世間話から始めて、思いや意向を引き出すよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時は情報の一部分と考え入所後、利用者と家族、面会に見える方々からコミュニケーションを通して利用者支援していくための情報を得る様、努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の細かな変化を記録に残す事で、現状を把握し職員間の情報共有を図っている。小さな事でも気づきは職員・、看護師等に相談している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者・家族と面会時等は積極的に情報共有し意向や困ってる事を確認しユニット会議で職員で話し合い介護計画を作成している。	6ヵ月毎の介護計画見直しは、それぞれのユニット会議でカンファレンスを兼ねて介護に携わる全員からの意見や提案をケアマネジャーが集約し、計画として取りまとめている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者の変化は季節・天候・面会・外出等でも変わる事、ADLや認知症の進行も観察しサービス計画と支援に繋げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法人内でソフト食の対応や小食の方には別メニューを用意したり、職員間で話し合い可能な限り自分たちで対応する方法を検討し支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事の見学で馴染みの方との交流や、家族に協力してもらい受診・外出で繋がり継続の保持を、またボランティアで楽しみを持つように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からの、かかりつけ医をスムーズに連携できるように家族と情報を共有し、必要時は職員の付き添いも行っている。	協力医を久慈病院としているが、大半の利用者は入居前からのかかりつけ医に通院しており、認知症の専門医がいる病院に通院している方が多い。歯科のみ訪問診療がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	専任看護師が常に入所者の体調や薬の管理、家族への説明等、細やかに目を届かせて利用者は安心して施設生活を送れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は職員が付き添い医療機関に細やかな情報を申し送りしている。入院中も家族・医療機関と連絡を取り合い。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所者の状態や介護度変更時の度には家族と話し合い、安心した生活を送れる陽にし、当施設での支援や生活困難な場合は他施設への移行がスムーズに行えるように努めている。	入居時に本人・家族に看取りは出来ない旨を説明し了解を得ており、これまで実績はない。食事が摂れない状態になった場合は、可能であれば入院を選択している。併設の結の里も定員等の理由から直ちに受け入れることは難しいのが現状である。	看取り実施の有無は、地域の外部環境如何によるところが大きいものの、多くの事業所のように、当面、職員のメンタル面や基礎的な技術習得に絞った研修を重ねることが望まれます。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	安全対策委員会、研修委員会の勉強会に参加し入所者の急変時に常に意識し支援している。今年度は消防署の方のアドバイスでバックマスクの勉強会を行った。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的な避難訓練を地域消防団の協力と運営推進会議と重ねて開催しているが、他の地域の方の協力を得るよう努めている。	高台の平坦地にあることから、津波、土砂崩れの危険はなく、火災に絞った訓練を重ねている。訓練に協力いただいた地域消防団からは、応援出動時の団と職員との役割分担の明確化を指摘され、検討することになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室はプライバシー保持空間と考え職員・他の入所者の出入りも気をつけている。一人の時間も大切に頂き施設生活に窮屈を感じないような支援に努めている。	利用者に合わせた言葉遣いはもとより、不穏症状等にある時には、こっそりを職員と一緒に味わって「あなたは特別」と感じていただくような、距離を感じさせない利用者一人一人を大切にする親密な介護に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者が思いを職員に伝えられるように普段から関係作りに努め、普段の会話からも思いをくみ取るように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事以外は個々に思い思いに過ごしてもらっている。会話・トランプ・読書・テレビ・散歩・昼寝等、自由に過ごされている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時の衣類は本人に選んでもらっている。職員が季節や気温をみて支援している。また家族にも定期的に確認してもらったり買い物をお願いしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は毎日の食事に飽きがこないように、外注でのお弁当・社協の宅配弁当・寿司の日・誕生日・入居者の希望の献立の日等で入居者が楽しみにしている。準備、片づけは出来る事を大事に手伝ってもらい行っている。	ホーム内の担当の一つである食材発注担当者が献立も立案している。家族からの差し入れ等を活用し、週に1回はそれぞれの利用者が好む食事を提供するよう工夫し、加えて、第1月曜日はお寿司の日としている。7割程度の利用者は何らかのお手伝いをしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	定期受診での検査結果や主治医との連携や体重測定等で一人ひとりの栄養状態の管理を看護師と相談し行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	法人で村内歯科医の協力を得て口腔ケアに取り組んでいたが今年度は口腔加算に取り組む、今まで以上に歯科衛生士と連携し口腔ケアに取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々のリズムを把握し最後までトイレで排泄出来るようにリハビリパンツや多様なパッドを試しながら支援している。夜間も定期的に誘導しオムツに安易に移行しないように職員皆で取り組んでいる。	両ユニット合わせて4、5人が布パンツを使用している。他のリハビリパンツ利用者は、日に一度程度の確認で足りている。夜間は出来るだけ起こさないようにし、両ユニットとも誘導は4人前後に留まっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立で野菜を十分に摂取出来るようにし、水分量も個々の好みを把握し十分な量を摂取してくれる様に提供を工夫し便秘と脱水には気をつけているが、下剤の必要な方は主治医と相談し処方してもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回の入浴日が決まっているが、入居者の受診や外出、気分等を考慮し変更している。また不穏症状を入浴で落ち着く方もいて、臨機応変に対応している。就寝前に入浴希望の方もいらっしゃるが説明し日中の入浴をお願いしている。	お風呂は午前中を基本に早番の職員が対応している。例外的に異性介助を嫌う方はいるが、ほとんどは問題ない。衣服の着脱はADLに応じて支援し、着替えは利用者により前日又は直前に用意している。足湯は、寝付られないなど利用者の希望に応じて対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	思い思いに過ごしてもらえる様に支援しているが昼夜逆転や引きこもり気味の方には声を掛け、日中の活動量を増やし安眠に繋がる様に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師を中心に既往歴から受診・薬の変更・日常の変化等を朝礼等の申し送りや記録で職員が周知し支援している。家族とも様子を報告し共有に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の残存機能し役割が自然に出来ている。職員が感謝の気持ちを持ち役割が生活の一部で生きがいに繋がるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	雨天や猛暑で例年より野外散歩に例年より行けなかったが、入居者の希望で買い物やドライブには出来るだけ対応し気分転換や地域を感じてもらう様に努めた。家族にも随時、協力をお願いしている。	管理者は天候不順により戸外活動を制約された年と振り返るが、それでも中庭の草取り、ジャガイモ掘りと出来るだけ戸外での時間を確保している。予定通り6月に実施した三陸鉄道レク(往路野田玉川駅～宮古駅乗車、復路自動車)を参加利用者は喜んでくれたとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設への訪問販売やドライブでの買い物で意欲や楽しみを維持出来る様に支援している。また家族と一緒に本人が好みの物を選択する楽しむ機会をもって頂ける様に願っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方にいる家族や親戚の方から電話があったり手紙が届いたりしている。法人の広報で日常生活が見えるように努めている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間は安全で清潔を心掛けている。レクの写真や掲示物等で季節や生活を感じてもらうように努めている。草花のある季節は職員が自然に飾っている。	淡い色調でまとめられたホールには、駅又は中庭に面した南面から明るい日差しが差し込んでいる。清掃の行き届いたホールの両側には、向かい合うようにオープンキッチンと事務スペースを配置し、利用者は、ゲームに興じたり、食卓の指定席でテレビを鑑賞し或いは職員と一緒に作品展示会の作品を作り込みに没頭している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自然に集まりトランプやソファで談話したり、2,3人で施設内散歩やテレビ観賞等、思い思いに過ごされている様子が見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室はプライバシー保持空間と考え職員・他の入所者の出入りも気をつけている。家族と自由に相談してテレビ・お位牌・ソファ等居心地の良い空間作りをお願いしている。	入り口には好みの暖簾と緊急時の避難確認用のカードが下げられている。ベッド、床頭台、小型チェストに洗面台が備え付けられ、冷暖房はエアコンになっている。衣装ケース、テレビ等利用前に周りにあったものが持ち込まれ、居心地の良い居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	車椅子やシルバーカーでも一人で自由に移動出来る安全な環境作りに努めている。		